

○迫害下のイラクの信者。神は決してお見捨てにならないことを確認○

マドリード、2015年12月1日。

NPO「苦しむ教会への援助」は最近バグダッドで、ISによって故郷を追われた避難民のために礼拝堂を建設した。「私たちは新しい礼拝堂を献堂することができました。私たちの難民が自分たちの小さな教会を持つようになったのです。これで、失った故郷の一部を取り返したと言えます。危険におびえることなくミサにあずかることができます」とルイス・モンテス神父は言う。

彼は「受肉したみことば会」のアルゼンチン人で5年前からバグダッドで働いている。この町は地球上で最も危険な町の一つと言える。「この10月だけで128回の爆弾テロがありました。当然、人々は教会に行くために外出するのを怖がっています」と。実際は、最寄りの教会は遠くにあるのではない。「しかし、危険のため、教会の方が彼らのいるところ、つまり避難民キャンプに行くことが大切なのです」。

モスル近郊にあるニネヴェから逃げてきた135家族は、昨年からの難民キャンプで生活している。このキャンプには聖母マリアの名前が付けられている。各家族には、荷馬車と車が支給された。全員がキリスト教徒でシリア典礼のカトリック教会に属している。「彼らは昨年すべてを失いました。ISが彼らの町カラコシュを攻撃したとき、着の身着のまま逃げ出し、全財産を捨てて行かねばならなかったのです」。

この人々のように、その時から12万人以上のキリスト教徒が難民キャンプで生活を余儀なくされ得ているが、キャンプのほとんどがイラクの北部にある。また何千人がすでに国（イラク）を脱出し、オーストラリアや西洋の他の国々に向けて旅立った。

「難民は、誰もが国を出たがっています。彼らがバグダッドに来たのは、北部の難民キャンプが満員だったからでもあります。とくにイラクを出るための書類を求めたからでした。ほとんどの人は故郷から逃げるとき、混乱の中で身分証明書を失ったからです」と説明する。

「彼らのうちに、ISが支配している故郷に帰ることができるという望みを持っている人は一人もいません。なぜならISを倒すことはできないと思っているからです。その上、彼らはイラクや、アラブ世界全般に対してもはや希望を持っていません」

大多数の人は故郷に帰ることを恐れている。イラクの北部にあるクルド人自治区で生活することができたらどうするかと尋ねられたある女性はこう答えている。「はい、あそこは今は安全な場所です。しかし、将来も安全だと誰が保証できますか。何年も前から大勢の人々がイラクとシリアから逃げ出しています。今また、この逃避を開始せねばなりません。私たちにとって最善のことは、完全に中東から逃げ出すことです」と。

これらの家族が申請しているビザはなかなか支給されない。そのため、彼らは不安のなかで暮らしている。モンテス神父は「彼らはもちろんこの状態に苦しんでいます。こちらで仕事を見つけられない人もいますし、なかでも家族の父親たちが困っています。しかし、人々の顔には、欧米の人たちの顔よりも喜びが見えます。自分たちは神への信仰を守ったという喜びで、これが彼らを支え希望を与えているのです」

難民がバグダッドに到着してから、モンテス神父は彼らの世話を当たっている。「私がすぐに気づいたことは、難民キャンプにお祈りをする場所が一つもないことでした。「苦しむ教会への援助」が助けの手を差し伸べてくれました。そのかげでコンテナを使った小さな礼拝堂を献堂することができたのです」。これから毎土曜日の午後にはカトリック・シリア典礼によるミサが捧げられることになるそうだ。

「献堂式では、人々の顔は感謝一色に染まっているように見えました。自分たちは忘れられてはいない、『苦しむ教会への援助』の人々が自分たちのことを考えていてくれるということを感じたからでしょう。この状況の中では、連帯を表すあらゆるしるしが大きな価値を持ちます。キリストの神秘体の中で私たちは一つです。互いに相手のためにすることは、みんなのためになるのです。この小さな教会はここに住む人々のために大きな助けです。しかし、これを建てるために助けた人々も、全ての信者もこれらの信仰の証し人たちからもらいます。彼らこそ、わたしたちが大切にしなければならない、教会の宝です」と強調した。

